

3 花 き

項 目	作 業 内 容
(1) デルフィニウムの定植	(今月の作業のポイント) ○デルフィニウムの定植 ○12月出荷用オリエンタル系ゆりの定植 ○ばらの栽培管理 ○シクラメンの栽培管理 ○台風対策 デルフィニウムの定植は、中山間地を除き、9月中旬～11月上旬までが適期となる。9月中旬～10月上旬定植はハウス内温度が高いため、定植10日前にはハウスを遮光率50～75%の寒冷紗で被覆し、2～3日前には定植床全体を十分かん水して地温の低下を図る。定植するセル苗は、夜冷育苗のため、夕方からハウス内で管理し、馴化させる。なお、活着不良等による枯死を防ぐため、9月中旬でも最低気温が20℃を下回らない場合は、無理をして定植しないようにする。 セルから抜き取った苗の根鉢を乾かさないうち注意し、生長点が土に埋もれないように浅植え気味に定植する。定植後は十分かん水して活着を促進するが、土壌表面に常に水分がある状態では根の張りが浅くなるため、活着してからは土壌表面が乾いてからのかん水とする（写真1）。  写真1 ‘さくらひめ’ 定植後の状況 (2) 12月出荷用オリエンタル系ゆり オリエンタル系ゆりを12月に出荷するには、氷温貯蔵球を9月に定植する。定植前には、10～15℃で3日間程度馴化処理を行う。その後、上根の伸長を促進し、葉焼け症の発生を回避するために、プレ・ルーティング処理（具体的な方法は8月の農作業を参照）を必ず実施してから植え付け  写真2 プレ・ルーティング処理終了時の球根

項 目	作 業 内 容
(3) ばらの栽培管理 (4) シクラメンの栽培管理	る (写真2)。 栽培ほ場は、排水が良好で有機質に富む土壌が好適である。土壌の pH が高いと鉄欠乏症が発生しやすいため、pH は5～6に調整する。 定植前には遮光率 40～70%の寒冷紗で被覆し、地温の低下を図る。 定植は日中を避けて、朝夕の涼しい時間帯に行う。植付けは上根が十分張れる深さが必要で、少なくとも 10 cmは覆土する。定植後はかん水し、地温上昇と過乾燥防止のため稲わらマルチを敷設する (写真3)。 オリエンタル系ゆりは、日照不足によるプラスチング (花飛び) はほとんど問題とならないため、植付け後も出蕾までは照度 3～5 万 lx 程度まで遮光して切り花品質の向上を図る。 ばらの施設栽培では、寡日照後の高温と強日射により葉焼けを起こしやすい。また、花蕾の発達後期に 35℃程度以上の高温に遭遇するとブルヘッド (奇形花) が多発する。 対策としては、換気に努めるとともに、寒冷紗やアルミ蒸着ネット等を日中高温時の数時間展張し、室温の低下を図ることが挙げられる。遮光は、日射しが強くなる時間に開始し、打切り時間は日の長さに応じて徐々に短くする。 日照時間が短くなる、または天候不順により日照量が低下するとシュート (新梢) の発生が少なくなる。株元のロゼット枝や弱小なブラインド枝を切除し、光が十分に当たるように整枝作業を行い、切り花本数の確保に努める。 9月には花芽が継続して分化し、分化後の花芽は急速に発達する。また、気温の低下とともに生育が旺盛となり株も大きくなる。肥培管理は、窒素：リン酸：カリを 2：1：3 程度の液肥施用とし、9月上旬から窒素濃度で 50 mg/L (ppm)、その後徐々に上げて開花期以降 (10 月頃) は 75～100 mg/L (ppm) で管理する。



写真3 地温上昇防止のための稲わらマルチ

項 目	作 業 内 容
(5) 台風対策	遮光は、日射しが強くなる時間に合わせて開始し、打切り時間は日の長さに応じて徐々に早め、日中の気温が 30℃以上にならない程度で最小限にとどめる。 夏季の高温が長引くと栄養生長が続き、生殖成長に切り替わらないことで花芽の発達が遅れる。年末開花が間に合いそうになれば、ジベレリン処理で開花を促進する。処理時期は9月上旬、濃度は1 mg/L (ppm)である。 幼葉の生長と花芽の充実、花首の徒長防止、さらに鉢のバランスを良くするために、この時期から最低月1回は葉組みを行うとともに、病害の発生源となる枯れ葉を除去する。ただし、葉組みは最初から強く行くと葉や葉柄にストレスを与え、高温に耐えきれず枯れ込む可能性があるため、葉組み程度は徐々に強くしていく。 ほ場や周辺設備等の点検は、川の増水等により人命に危険があるため、必ず風雨が激しくなる前に済ませておき、決して増水中の川や水路に近づかない。 台風情報に注意し以下の対策を講じる。 ○施設の周辺に防風網を設置して、風当たりを弱める。 ○被覆資材の破損箇所を補修するとともに、ハウスバンドを締め直す。 ○パイプハウスは竹材や直管で筋交いを入れ補強する。 ○露地は畝間に水が停滞しないよう排水溝を整備する。また、支柱を補強しネットを引き上げ倒伏の軽減を図る。 ○採花期に達しているものは、事前にできるだけ採花しておく。

(作成 農林水産研究所)